

19世紀における中国とイギリスの文官任用試験制度 の比較研究

劉 恩慈 Lau Yan Chee

(京都大学大学院)

はじめに

報告は中国とイギリスの文官任用試験制度を制内に比較するのではなく、それを支える背後要因の共通点を検討することを課題とする。東洋と社会との交流が頻繁となり、東洋社会の文物制次第に西洋社会に知られるようになった。その

中国の科挙が16世紀ごろ、宣教師によって西に伝えられていた。今までの試験制度について研究から見ると、科挙と西洋社会の試験制度にて両論に分かれている。天野は西欧の近代社会の制度を中国から学んだと言った。一方、コッパの競争試験の伝統は中世にヨーロッパにたつたイエズス会の学校に求めることができると指摘した。さらに、イギリスに関して、イギリスの「官僚採用試験科挙モデル説が後日、ICS (an Civil Service)の人気を盛り上げるための『ICS』の一つとして作られたのではないか」というもある。はっきりした史料が見つからない限り上記の二つの立場はどちらがもっとも妥当であるか検証しようがない。また、そのような歴史的な社会学にとって、もはや重要ではない。むしろいわゆる「科挙モデル説」がどうして生まれたというところは本報告の問題関心である。

際、科挙モデル説の検証についての議論が既から始まっている。中国系のアメリカ人学者らイギリスで競争試験の導入をめぐるもっとも激論争が起きている19世紀中葉ごろの国会議事録持主流の6つのジャーナルを調べていた。当競争試験の推進派と反対派双方は国会弁論のしばしば科挙を直接に言及することがあった。派は科挙の制度そのものより、その業績本位の原理と効率性のほうをもっとも評価していた。派は中国の政治的、経済的及び軍事的な遅れと

いう理由で、反対論を立てていた。一方、ジャーナルにおいては、それに似ている議論が展開されていた。最後に、次ぎのような結論が出された。つまり、競争試験が導入される以前、科挙がイギリス社会に良く知られていた。また、国会やマスメディアに競争試験についての議論がよく科挙と関連されていた。国会内外は競争試験が中国の制度であるという認識を持っていた。それで、ここで問題となるのは何故イギリスの指導者たちがそれほど意識していたのかということである。また、その結果として、イギリスの官僚任用の競争試験制度はどの点で科挙に似ていたのかということをもっとも見て行きたい。

■ 両者の共通点

まず、科挙について簡単に紹介しておこう。科挙は7世紀の唐代から今世紀初頭まで中国に行われた文官採用試験制度である。それは人の属性を一切排除し、試験での答弁の能力に基づく業績主義的な選抜制度である。それは主に郷試、会試、殿試という3段階の試験から構成され、各試験の合格者は挙人、貢士、紳士という順に学位が授与される。全ての試験は中央政府にある「礼部」によって3年1回に行われる。獲得した学位の順位に従って、官職が与えられる。試験の内容は四書五経という古典が中心となる。

イギリスの官僚採用試験制度はその後、大きく変化していったが、イギリスの公務員試験の基礎となる1853年に出されたTrevelyan & Northcoteの"The Organization of the Permanent Civil Service"という国会への報告書に見られる試験制度の構想と比較してみたところに、見られた共通点は以下のようなものである。試験を監督する中央の試験官の設置、教

養主義的なまたは文学的な知識を中心とする競争試験、試験が定期的に行われ、かつ全ての人に開放すること、使用期間の設置、応募者の道徳的な水準の重視、業績に基づく昇進などである。また、報告書を作成している段階に、3段階の試験制度の構想が盛り込まれていた。そのいずれも科挙と似ているのである。

■ 教育制度との関連

以上、イギリスが官僚任用試験が導入される際、科挙がよく言及され、また、科挙に似ているところが多いということが分かる。しかし、プロシアなどのヨーロッパ大陸の国はイギリスより早く官僚採用試験制度を確立した。近いところに前例があるのに、なぜわざわざ遠いところにある中国の科挙を論争の渦に巻き込んだのか。実際、国会弁論の中にプロシアの官僚採用試験制度が言及された。しかし、その取扱は科挙と反対、完全に専門知識にもとづく官僚採用試験を行っていたプロシア型はイギリスに好ましくないとされていた。

試験制度は人材を選別するものであり、そのありかたは人材を育成する教育制度と深くかかわっている。また、教育制度の性格は社会からの需要によって規定される。社会の教育システムへの需要には実用的技能、身分の成員資格、社会統制への官僚制的関心という3種類がある。中国社会において、人材養成という目的で、全国各地で「官学」を設立する政策があったが、実際に、それは名目上の政策で、政府はめったに学校教育に力を入れなかった。生徒はただ官学で学籍を置いて、定期的に試験を受けるということだけで、学校ではほとんどなにも教えていなかった。生徒はほとんど外の私塾で勉強することになっていた。教育内容は古典中心とした文学的な教養である。それは科挙の主要試験科目である上、また支配階層である文人身分層の一員となるにはこうした教養主義的な素養を身に付けなければならなかった。社会統制の面からいえば、実質的な教育が行われていないが、官学は生徒の学籍を管理することによって、社会的な統制が図られていた。ま

た、教育で儒教思想を貫徹させることによって、文人による行政権力の独占が保たれていた。

イギリスは同じく、古典中心とした教養主義的な教育がパブリック・スクールとオックスブリッジで行われていた。そのような教育を受けるには、高い教育費用がかかるので、実質的にいわゆるセントルマンという階層の子弟のみ受けることになる。イギリスの官僚採用試験はこういったパブリック・スクールとオックスブリッジの教育内容に準ずるもので、従来のセントルマン階層が既得の権利を守ることができたのである。

■ まとめ

中国とイギリスの文官任用試験についてさまざまな論議がなされていた。科挙はイギリスの官僚採用試験に影響を与えたか否か両論に分かれるが、その導入の際、科挙がよく言及されていたことは事実である。後の試験制度は科挙と似ているところが多いことはまた事実である。19世紀に、イギリスは大学教育水準の低下、縁故採用による官僚能力の不振、中産階級の台頭などの問題を直面しており、官僚制の改革を行われざるを得なかった。有能な人材を確保するため、競争試験を導入しなければならなかった。しかし、その官僚制改革は今までの縁故採用をやめ、競争試験によって任官され、上層階級の子弟の質を向上させる狙いがあった。競争試験で人材を選抜して、かつ支配階級の文化を維持していく側面は科挙と共通していると言える。当時のイギリスの指導者は科挙を意識したのは、科挙が縁故採用を排除し、業績主義に基づくということだけでなく、古典を中心とした教養主義的な文人階層を支配構造に持続させるということではないか。また、19世紀に中国の国力が衰えていたものの、18世紀後半から始まったフランスの知識人が中心とした中国文化に対するあこがれという思潮がその背後にあるのではないかと考える。